

就学前の子らの通所サービス

発達支える「療育」ニーズ増

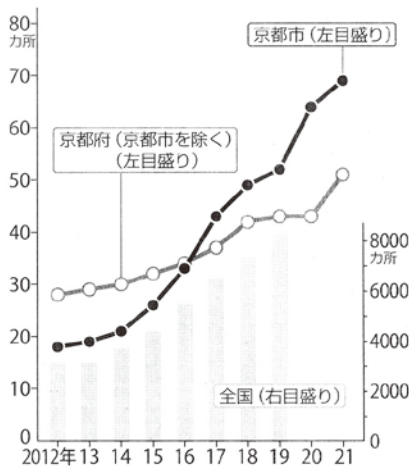
京都、10年で施設4倍増／宇治は「待機児」高止まり

「療育」を知っていますか。発達などに課題がある就学前の子どもの対象にした通所型福祉サービスのことで、2012年の児童福祉法改正に伴ってきたサービス提供施設「児童発達支援センター・事業所」が全国で増えている。京都府内もこの10年間で京都市が4倍近くに増えたが、一方で職員確保などもネックになり、同市以外では伸び悩む。宇治市では近年、ニーズ増にサービス提供が追いつかない「待機児」が年10人超えている。

同施設は、人との意思疎通など日常生活の基本、集団生活への適応などに課題がある子を、大学の福祉学などを卒業した児童指導員や保育士らが支援する。利用するのは自閉症やアスペルガー症候群、注意欠如・多動症（ADHD）などの子や、乳幼児健診で発達の課題を指摘された子が多い。知的障害や難聴、肢体不自由などの子どもも通う。

発達障害は近年、広く知られるようになり、全国の療育施設は厚生労働省の資料によると12年の3120カ所から、19年は約2・6倍の8254カ所に増えた。京都市も12年の18カ所から21年は約3・8倍の69カ所に増え、利用する子の数も19年に2397人と12年比約2・2倍となった。

児童発達支援センター・事業所の個所数



児童発達支援センター・事業所 事業所は子どもや家族の支援に取り組み、センターは中核施設として地域支援も行う。国の人員配置基準は、児童発達支援管理責任者1人以上、児童指導員や保育士らをセンターは子ども4人に1人以上、事業所は10人に2人以上などと定める。利用には、医学的な診断や障害者手帳は必須ではない。3〜5歳児は幼児教育・保育無償化で利用者負担はなく、3歳未満は1割負担など。

21年度13人と高止まりする。宇治市は年度当初からの利用に關し、1月に一斉申請で受け付ける。重症心身障害児対象の1カ所を除く4カ所の空き見込みや各家庭の希望順位、子どもの発達状況を踏まえ、通所先を割り振る。保護者が通所先を選定他自治体もあるが、市は「必要度が高い子から、できるだけ多くの子が通える」と利点を語る。

同市は23年度には市外施設への通所も含めて250人が利用すると、今後増加を見込む。待機児向けに代替の教室も開いているが実施回数は少ない。民間による施設構想もあったが立ち消え、既存施設の定員増も職員確保の面から容易ではない。「待機児解消の抜本策は見えていない」（保健推進課）が現状だ。（相見昌範）



職員のみめ細かな支援のもと、感覚統合遊具で遊ぶ子どもら（宇治市榎島町・ころぼっくるの家）

☉インサイド 遊びで生活に必要な力はぐくむ

「療育」の現場で、子どもたちはどのように過ごしているのだろうか。宇治市榎島町のNPO法人「アジュール舎」が運営する児童発達支援事業所「ころぼっくるの家」を訪れると、子どもが遊びの中で見せる意欲のサインをスタッフが丁寧に観察し、人との関わりなど集団生活に必要な力を底上げする様子があった。

6月上旬。同事業所の一室に、欠席の2人を除いた3〜4歳児3人が親と一緒に集まり、公認心理師や保育士など職員3人と、週1回2時間のプログラムを始めた。まずは感覚統合遊具で自由に遊ぶ。天井からつり下げた棒にぶら下がって回転したり、ビニール製のトンネル（直径50センチ・長さ3メートル）を四つんばいでぐぐり抜けたりする。

姿勢の保持や、手足を協調させて動かす力をはぐくむ狙いがあるという。職員は「年齢が上がれば集団生活の中で、運動やお絵描きなどの手を使った作業が増える。その際の土台の力として必要」と説明する。

続いては親子タイム。「なべなべそこぬけ」の歌に合わせて、親子がつないだ両手をねじって背中合わせ。上手にできると、職員らが拍手してほめ、他人と力を合わせる意欲をくすぐる。次の遊びでは、子ども同士で順番争いが生じた。

少人数制、意欲大切に

職員2人が端を持った棒に子どもがぶら下がり、少し離れた親の所まで運ばれて抱き合う遊びで、ある男児は1巡目のトップバッターに指名されたものの尻込み。代わりに他の女児が楽しむ様子を見て、2巡目は「1番がいい」と言った。女児も1番を主張したため、それぞれの思いを職員が丁寧に聞き取ると、男児は「2番がいい」と納得し、笑顔で遊んだ。

「発達に課題がある子は気持ちをうまく出にくい」と亀口史洋所長（41）。「療育現場は手厚い人数のスタッフが少人数の子どもを見るので、支援の内容やタイミングが異なる子どもそれぞれに、丁寧に対応できる」と話す。

口頭での指示が通りにくかった次男（4）を今年4月から通わせる30代の夫妻＝宇治市＝は「並行して通う幼稚園は先生が多くの子どもを見ていることもあり、次男は集団の中で取り残された気持ちを感じていたようだが、療育に通い始めて集団参加意欲が芽生えた」と笑顔を見せる。

同事業所は本年度、2〜5歳児の計48人が1日約10人ずつ通う。同市における待機児増について、亀口所長は「療育の質を上げるため、職員数は国の配置基準より増やしている。建物の容量の点からも、今の子ども数が精いっぱい」と苦渋の表情を見せる。（相見昌範）